



カレイ



かれんと いんぷおめ〜しょん

2007.10.1 発行：No.58
TEL 03-3985-2628
立教大学図書館

特集「キャリアと図書館」

キャリアとは、その人らしさのこと。図書館で探してみませんか？

今号のカレイの特集は、「キャリアと図書館」です。接点がなさそうに思える「キャリア」と「図書館」ですが、「キャリア」を考える時に「図書館」はあなたのお役に立てる場所になるかもしれません。

■自分らしい人生を！

数年前は「就職難」や「就職氷河期」といわれていましたが、今では第二バブルともいえる学生にとって有利な状況があるようです。かつては「一社一生」、一つの会社に就職したら定年を迎えるまでそこで働くという単線型のキャリアコースが日本人の働き方の主流でした。しかし、近年日本でも「人材流動化」が現実的なものとなり、「ポータブルスキル」（業界・業種や職種に限定された能力ではなく、時代を超えた普遍的な＝持ち運びができるスキル）を身に付ける必要性が高くなってきています。

積極的な転職が当たり前の時代において、学生の皆さんは「就職活動のため」にだけでなく、「自分らしい人生を送るため」に大学時代から人生において何が大事か考える必要があります。さらに言えば、3・4年生は実際に就職へのアクションを起こす時期なので、1・2年生の頃こそ人生について真剣に考えるべきなのです。これだけは譲れない大切なものを模索することで、自然と自分に合ったキャリアが開けてくるのではないのでしょうか。

■知らないことを知るという喜び

図書館には授業の助けになるような本に留まらず、キャリアを考える学生の「自己実現」に役立つ本があります。

図書館は知の宝庫。図書館は学生のみなさんの興味や視野を広げる恰好の空間です。アナログなやり方かもしれませんが、図書館の書棚を見て回っててください。未知の世界との出会いは、生き方の選択肢を増やすきっかけとなるでしょう。直接職業と結びつくような本でなくても構いません。どう生きるかという気付きのきっかけを与えてくれる本と図書館で出会ってください。

「キャリア」も「価値観」も人それぞれ。本を通し多様な価値観を吸収して、あなたらしい人生を歩んでください。

※本稿は、キャリアセンター・加藤敏子事務部長のお話を参考に作成しています。ご協力ありがとうございました。

目次

キャリアとは、その人らしさのこと。 図書館で探してみませんか？	p1
自分らしく生きるヒントとなる本	p2
「就職活動」へ向けた図書館活用法	p3
<読書ナビ>20回 ジェンダーを知る10冊	p4

自分らしく生きるヒントとなる本

■大学生の自分を見つめる

就職活動なんてまだまだ先のこと、と思っている1・2年生は多いかもしれません。しかし、自分の人生を考えるのに早すぎることはありません。自分の将来がまだ漠然としているならば、今の自分について考えてみてはいかがでしょうか。「大学時代をどう生きるか」「大学になぜ通うのか」—そうした普段は考えないけれど、実は基本的な疑問に答えてくれる3冊です。

『二十歳（はたち）のころ：立花ゼミ「調べて書く」共同製作』（立花隆、東京大学教養学部立花隆ゼミ著、新潮社、1998年）
[本館・新座図]

『大学に行くということ、働くということ』（樋口美雄著、岩波書店、1999年）
[本館]

『キャリアに揺れる：迷えるあなたに贈るブックガイド30』（上西充子、柳川幸彦著、ナカニシヤ出版、2006年）
[本館・新座図]

■「働く」をイメージする

自分が働く姿をイメージできない、そんな時には実際に仕事をしている方の姿や言葉を参考に想像し

てみましょう。各方面で活躍される方の働き方を知ることによってあなた自身の働き方が少し見えるはずです。

『仕事力』（大前研一[ほか著]；朝日新聞社広告局編著、青版、朝日新聞社、2005年）
[本館・新座図]

『プロフェッショナル仕事の流儀』（茂木健一郎、NHK「プロフェッショナル」制作班編、日本放送出版協会、2006年）
[本館・新座図]

『映画が語る働くということ』（佐藤忠男著、凱風社、2006年）
[本館・新座図]

■仕事と人生

なぜ就職をするのだろうか、なぜ仕事をするのだろうか、と考えたことはありませんか？これは答えのない問いかもしれませんが、結局は自分で探し求めるものなのかもしれません。そんな時にヒントになる本です。

『働くって何だ：30のアドバイス』（森清著、岩波書店、2006年）
[本館・新座図]

『働くことは生きること』（小関智弘著、講談社、2002年）[本館]

📖 キャリアセンターおすすめの本 📖

キャリアセンターにも、以下の本をはじめとして、キャリアについて考える材料となる本が置いてあります。自由に閲覧できますので、ご利用ください。（④は社会科学系図書館、他は本館でも所蔵）

- ①『池上彰の新聞勉強術』（池上彰著、ダイヤモンド社、2006年）
- ②『質問力：話し上手はここがちがう』（斎藤孝著、筑摩書房、2006年）
- ③『妹たちへ：夢をかなえるために、今できること』（日経ウーマン編；阿川佐和子[ほか著]、日本経済新聞社、2005年）

- ④『ガイアの夜明け未来へ翔ける：日経スペシャル』（テレビ東京報道局編、日本経済新聞出版社、2007年）
- ⑤『「相手の聞きたいこと」を話せ：プレゼンテーション・マインド』（大島武著、マキノ出版、2006年）
- ⑥『しびれるほど仕事を楽しむ女たち：ウーマン・オブ・ザ・イヤー』（日経WOMAN編、日本経済新聞社、2005年）

「就職活動」へ向けた図書館活用法

■就職活動に疑問や不安を感じたら…

大学3年生になると、「そろそろ就職活動について本格的に考えないと…」と思い始める学生のみなさんは多いでしょう。しかし、実際のところは「就職活動って大変そうだからやりたくない」「社会に出るのは不安だし腰が重い」「何から手をつけたらいいのかわからない…」といった思いを抱えている方が大半なのではないでしょうか？

不安を感じているのは自分だけではない、と気付くだけで気持ちが楽になる場合があります。例えば、下記に紹介している本を通して自分の不安と直面してみると、思いもよらなかった解決策が生まれるかもしれません。

『就職がこわい』（香山リカ著、講談社、2004年）

[本館・新座図]

『働く意味』（小島貴子著、幻冬舎新書、2007年）

[本館・新座図]

■就職後を見据えて…

「どの企業に就職するか」ということも大事ですが、「社会人になってからどのようにキャリアを歩んでいくか」ということも非常に大事です。

社会人になってから、賢く元気よくキャリアを積んでいきたい…そのように先を見据えながら就職活動を行うことで、みなさんの視野もぐっと広がるのではないのでしょうか。

『働くひとのためのキャリア・デザイン』（金井壽宏著、PHP研究所、2002年）

[本館・新座図]

『情報の海の泳ぎ方』（金融財政事情研究会編、金融財政事情研究会、2006年）

[本館・新座図]

■オンラインデータベースで効率的な情報収集を

立教大学では様々なオンラインデータベースを契約していますので、学内のパソコンを使って自分に必要な情報をどんどん収集しましょう！最新の時事ニュースや企業情報を知っておくと、いざ就職試験を受けるときにきっと役に立ちます。

オンラインデータベースは、学内のみ、図書館Webサイトから閲覧することができます。

《日経テレコン21》



日経4紙（日本経済新聞、日経産業新聞、日経流通新聞、日経金融新聞）、企業情報、人事情報などが横断的に検索できる、日本を代表するビジネスデータベースです。

《日経BP記事検索サービス》



日経BP社の発行する雑誌から、約30誌の記事データを収録。（主な収録誌：日経ビジネス、日経アーキテクチュア、日経デザイン、日経コンピュータ、日経ヘルスケア21等）

※年間の記事閲覧数に制限がありますので、必要以上に記事を閲覧しないようお願いします。

ジェンダーという言葉は、「男／女であること」が人間に生まれつき備わっている本質的な属性ではなく、歴史的・文化的・社会的に構成されたものであることを示すために、1970年代、フェミニストたちによって使われはじめた。しかしそれよりずっと前に、ジェンダー論の原点を画す古典的名著『第二の性Ⅰ 事実と神話』『第二の性Ⅱ 体験』（シモーヌ・ドゥ・ボヴォワール著、『第二の性』を原文で読み直す会訳、新潮文庫、2001年）が書かれている。「人は女に生まれず、女になるのだ」というあまりにも有名なテーゼは、ジェンダーはセックスとは違うものである、ということの明確な表明にほかならない。この本の著者ボヴォワールの評伝『ボヴォワール：女性知識人の誕生』（トリル・モイ著、大橋洋一ほか訳、平凡社、2003年）と併せて読むと、そこに描きだされた「女の状況」（＝主体であろうとすることと「女であること」との間で「引き裂かれて」在るしかない苦痛）が、現代の女性たちにとっても今なお重くのしかかる「現実」であることに思い至り、改めて驚かされる。ジェンダーについて一から考えたい人には、『知らないと恥ずかしいジェンダー入門』（加藤秀一著、朝日新聞社、2006年）がそのきっかけを与えてくれる。基本的な知識だけでなくジェンダーを知ることの深い意味に触れることができる。

『ジェンダーと歴史学』（ジョン・W・スコット著、荻野美穂訳、増補新版、平凡社、2004年）は、歴史学という学問がいかに男性中心の視点から性差にまつわる知を生産・再生産してきたかを告発し、『制度としての「女」』（荻野美穂ほか著、平凡社、1990年）は、性分業の構造や近代的な女性のイメージがどのように形成されてきたかを明らかにする。

『インターコース』（アンドレア・ドウォーキン著、寺沢みづほ訳、新版、青土社、1998年）は、性差別の根源を性的行為そのものに見ることによって、異性愛制度の自明性を突き崩し、愛について考えることの困難を突きつける。ジェンダーは、私たちの生にとって、相対的であるだけではなく、きわめて拘束的でもある。「男／女であること」は、私がどのような人間であるかということ＝アイデンティティの中核を成しているからだ。『「レズビアン」である、ということ』（掛札悠子著、河出書房新社、1992年）の著者は、「私とは何か」を問いつづけ、「私がレズビアンの一つの現実である」と言いうる地点にまで到達した。『私という病』（中村うさぎ著、新潮社、2006年）には、「女であること」の核心に位置する「男の性的対象であること」にどこまでも拘泥し、なお自分自身＝主体でありつづけようとする著者の心の葛藤を読み取ることができる。『欲望問題』（伏見憲明著、ポット出版、2007年）には、常に日本のゲイリブの最前線に立ちながら、「ゲイである」という自らのアイデンティティを、弱者至上主義に陥ることなく相対化する視点が示されている。

ジェンダーを知ることで、私たちは人間が一人一人異なった性的存在である、という事実気づくことができる。それは自分自身の生を豊かにし、他者を尊重することに繋がる。ではそのためにもっとも大切なことは何か、その答えが『女たちの絆』（ドゥルシラ・コーネル著、岡野八代・牟田和恵訳、みすず書房、2005年）の中にある。他者がそのアイデンティティを自由に組み立て夢見ることのできる「心の空間」をそのまま認めるということ、それが他者を尊重することなのである。

※文中にあげられた資料はすべて立教大学図書館で所蔵しています。

開館日程等については図書館のホームページでご案内しております。

(<http://opac.rikkyo.ac.jp>)

※その他変更がある場合はその都度、掲示でお知らせします。